意味から享楽へのシニフィアン理論の変遷
― Lacan におけるエディプス・コンプレックス論をもとに ―

河野　一紀

1．はじめに ― 人間関係を支えることば

精神分析はことばに基づいた営みとして Freud,S. によって創始され、現在でもその基本原理は変わることなく受け継がれている。ヒステリー者に対する、催眠とは異なる治療手段として、Freud は自由連想ということばの実践を導入し、それをもとにした精神分析は人間存在に対する固有のパースペクティヴを開くことになった。そして、このパースペクティヴは、単に人間存在についての理解に対してだけではなく、人間存在における関係、すなわち、主体としての我々にとっての他者との関わりに対するものでもあった。この点に関して、Lacan,J.（1977）は、Anna,O. や Emmy von N. ら、Freud が精神分析の黎明期に分析をおこなったヒステリー者に言及しつつ、以下のように述べている。「Freud が彼女たちのことばを聴き始めた時、精神分析の誕生を可能にしたのはまさに彼女たちだった。彼女たちのことばを聴くことによって、全く新しい人間関係の在り方を Freud は創始したのだ。」ヒステリー者のことばを聴くことから、彼女らは自身が言っていることを何一つ知らないというひとつの結論を Freud は導き出し、そこから無意識に基づく精神分析に固有の人間関係の在り方は生み出されたのであった。さらに、この人間関係の在り方がことばを聴くという実践からもたらされたということが示すように、精神分析は、話存在としての我々にとって全く新しいことばの在り方に焦点を当て、探求することになった。

自由連想においては、ことばは一般に考えられているようなコミュニケーションの道具としての役割を単に果たしているのではない。こころに思い浮かぶことを全てそのまま口にするというこの技法の原則に従うならば、精神分析の場は、分析主体が考えたことや理解したことを順序立てて口にして、ことばを操ることを通じて、内省を深めていくような場ではありえない。むしろ、ことばは、思いもよらないかたちで、分析主体を出し抜き、驚きとともに無意識を露わにするものとして考えられたのであった。すなわち、精神分析においては、Freud（1900）が「ことばは、無数の思考の結び目であるがゆえに、曖昧さを宿命づけられていると考えられるかもしれない」と述べたように、ことばの意味は我々にとって自明なもの、了解可能なものの次元に位置づけられるものでは決してない。そして、まさにこのような理由ゆえに、分析家は平等に漂う注意を維持し、先入観を持たずに、しかし同時に最大限の注意を払いながらことばを聴き、それに基づいて解釈をおこなうということを忘れてはならないのである。分析主体の症状が分析を通じた読解を必要としたように、そのことばも分析家による解釈を必要とし、読解や解釈を必要とする謎としてのことばが、分析のプロセスを展開していく原動力として考

えられたのであった。

精神分析におけることばの問題をFreudから受け継ぎ、Lacanは精神分析理論に独自の深化をもたらした。Freudの読解を通じてLacanは、シニフィアンの理論を構築し、神経症の主体の構造についての考察を展開させた一方で、博士論文である『人格との関連から見た自罰パラノイア』の頃から一貫して、精神病への理解と関わりの可能性についても独自の思索を深めた。そして、Freud理論における欲動（Trieb）を享楽（jouissance）として概念化し、我々の思考や理解といった二次過程としての心的事象を支えるものとしての「意味」ではなく、主体の満足そのものの次元にある享楽に働きかけることをねらった技法理論をLacanは導き出した。これをもとに、現在のLacan派では、神経症や倒錯についての新たな理解や精神病の治療、さらには自閉症への関わりなど精神分析のさらなる可能性が模索されている。

本論では、Lacanにおけるエディプス・コンプレックスとシニフィアンによる主体の生成の理論についての再考に注目することを通じて、シニフィアンの理論が意味の次元を超えて、享楽と結びつけられるようになった理論的変遷を明らかにし、そこから導き出された帰結をもとに、解釈と転移についての技法理論的考察をおこなうことを目的とする。この試みは、シニフィアンと享楽の関係を不可能性によって特徴づけ、両者を対置して論じる従来の議論にとどまらず、1970年代のLacanの思索、主にセミネールXVIIでの議論をもとに、より原初的な次元での主体の生成におけるシニフィアンの起源と享楽の結びつきを明らかにするものであり、現在のLacan派での展開とその臨床的意義を検討するにあたっての助走となるものと筆者は考える。

2．Lacanにおけるシニフィアンの理論 ― Freud的無意識の読解

ことばの意味について考えるとき、その基本単位は語（mot）であると一般的には考えられている。例えば、「カウチ」という語が寝椅子を意味しているといったように、語はそれ自体で独立した意味するものの単位として考えられている。しかし、Lacan（1955-56）は、「語は恒常性を持っているかに見えるが、周知の通り、それには正当にも異議が唱えられている。確かに、ある点から見れば語の独立性というものを認めることができるにしても、それは決定的なものとは考えられない。…語をランガージュの単位と考えることは決してできない」と述べ、このような考えを退けている。そして続けて、語に代わるものとして、「音素の対置や音素の結合」（ibid.）にLacanは言及している。Freudが機知や失錯行為としての言い違いに注目したように、ここで問題となっているのは、アプリオリに想定される意味のまとまりとしての語のような、意味の自明性の上に成立したことばではなく、意味の成立以前の音の次元に属する、聴かれるものとしてのことばそのものであるということが理解される。そして、このようにとらえられたことばにおいて意味は、自明なものではなく、不可避に曖昧さを孕んだものと考えられるのである。

この曖昧さをとらえる概念として、LacanはSaussure, F. de.のシニフィアンの概念を取り上げる。しかし、Saussureはことばの意味につきまとう曖昧さに気づいてはいたが、彼においては「完全に満足できる方法で、定義がいつも与えられていたわけではない」とLacan

（1953-54）が指摘しているように、Saussure のものとは根本的に異なるものとして、Lacan はシニフィアンの概念を独自に再概念化したのであった。[1] Saussure において、聴覚イメージ（image acoustique）としてのシニフィアンは、概念（concept）としてのシニフィエと対になることによって記号（signe）という単位を構成すると考えられた。そして、「言語記号は、二つのとても異なるものが頭の中で結びついた上にあるもの」と Saussure（1910/2007）が述べているように、シニフィアンとシニフィエは、恒常的なつながりをなしていると考えられていた。Saussure においてそのつながりを維持しているのは、「最初の原理あるいは最重要の事実：言語記号は恣意的である」（ibid.）と述べられているように恣意性という概念である。このように、Saussure は記号をラングというあるひとつの総体としての言語の次元、つまり、共時的な次元から考えることから、シニフィアンとシニフィエの結びつきを恣意性に訴えて説明する試みをおこなっている。

だが、Lacan はその再概念化を通じて Saussure における記号という単位を解体する。Saussure の記号においては、シニフィアンとシニフィエの表裏一体性や相互性が強調されるのに対し、Lacan（1955-56）は「シニフィアンとシニフィエの独立性」を主張している。そして、ことばが発され、それが聴きとられるという分析における一連の流れ、つまり、通時的な流れの次元からシニフィアンを概念化した Lacan にとって、シニフィアンはシニフィカシオン（signification）において、それと対になるシニフィエから常にずれて、その結びつきを維持できないと考えられた。したがって、Saussure が強調した恣意性というかたちでも両者の結びつきを想定することはできず、「シニフィアンとシニフィエの関係は誤って、恣意性として考えられた。…恣意性に取って代わるのは、シニフィエとしての効果はそれを生み出すものと何の関係も生み出さないようだという事実である」と Lacan（1972-73）は主張するまでに至っている。

以上から、シニフィアンはシニフィエを 1 対 1 対応で表象するような意味の単位として考えることはできないという Lacan におけるシニフィアンの概念の基礎が理解される。シニフィアンとシニフィエはひとつの全体性、記号という単位をなすという考えは退けられ、Lacan の関心はもっぱら、それ固有の意味を伴った単位ではない、それ自体では何も意味しないものとしてのシニフィアンに向かうことになる。このシニフィアンという概念に基づくならば、ことばの意味はある特定のシニフィアンによって担われるようなものではなく、シニフィアンのつながりにおいてのみとらえられるという、シニフィアンと意味の非対称的な関係を見出すことができる。これは、「ランガージュの機能は、情報を伝えること（informer）ではなく、何ごとかを喚起すること（évoquer）である」という Lacan（1953）の主張に見出されるような、発話は我々がアプリオリにその意味や内容を想定しているような語という単位の総和以上のものであるという考えを反映したものである。シニフィエに対するシニフィアンの優位や、シニフィアンの連接（articulation signifiante）によってもたらされる、シニフィアンの効果としてのシニフィカシオンについて Lacan が論じたのは、このように常に我々にとっての理解や自明性を逃れる次元において、意味という概念を精神分析の領野で取り上げるためであったと考えられる。

このようなシニフィアンの理論に、Freud における無意識の在り方を我々は見出すことがで

きる。無意識の形成物としての症状や夢、幻想が、それに対する連想や解釈といった別のシニフィアンと結びつけられることによってのみその意味が探求されるように、Freud にとって無意識は、意味の自明性の裂け目、シニフィアンとシニフィエの裂け目に見出されるものであった。そして、Lacan はシニフィアンの理論によって、シニフィアンの連接がもたらすものとしての意味の次元こそが、Freud 的無意識の探求において問題となるということを明らかにしたのであった。

３．エディプス・コンプレックスにおける主体の構成と父の名

シニフィアンに１対１対応するようなシニフィエとしての意味や指示対象は存在しない。これはシニフィアンにとっての指示対象が不在であるということを示す。エディプス・コンプレックスの再概念化を通じて Lacan は、この不在を欠如として導入するシニフィアンを、ファルスという概念で取り上げている。そして、エディプス・コンプレックスを、ファルスというシニフィアンによって導入される欠如をめぐるプロセスと Lacan は考え、それを３つの時に分けて、それぞれ欠如の３つのかたち、フラストレーション（frustration）、剥奪（privation）、去勢（castration）と対応させて論じている。

エディプス・コンプレックスの第一の時において問題となる想像的なものとしてのファルスは、こどもが体験する母の乳房の在－不在のコントラストに介入し、こどもと母と共に三項関係をなす要素と考えられている。ここでの母は、乳房の在―不在のコントラストを構成するエージェント（agent）という象徴的な役割を担っており、一方で、在―不在の対象である母の乳房は、現実的なものとして、「それが対象としては知覚される以前に主体の諸関係に影響を与えているもの」（1956-57）と考えられている。こどもは、母の乳房の不在をファルスと結びつけることで、母は自分自身ではなくファルスに関わっているがゆえに、自らの呼びかけに即座に応えないのだと考え、最初の欠如であるフラストレーションを体験することになる。母は自分ではなくファルスという特権的な対象を欲望するというこどもの理解は、「根本的な失望」（ibid.）を引き起こす。

これによって第二の時にこどもは導かれる。母が自分の問いかけに即座に応えないということをこどもが理解するようになると、こどもと現実的な対象との関係に不可欠な母そのものは、「構造から抜け出て現実的なものになる。」（ibid.）Lacan はこの時を特徴づける第二の欠如を剥奪として、それを母における剥奪、つまり、母にはファルスが欠如しているということをこどもが理解するようになることと関連づけている。そして、現実的なものとしての母は、自ら欠如しているファルスの代わりに、自分自身をファルスと同一化し、自分自身をファルスとして差し出すことをこどもに強いるようになり、ここから近親相姦的な母子関係が生じるとされる。このような状況において、父が禁止をもたらすものとしてこどもの前に現前する。

第三の時に、こどもは父による禁止に従い、母から強いられた試みを諦め、去勢を体験する。父はこどもに自らがファルスを持っているということを示し、こどもが母にとってのファルスになることが不可能であるということを理解させ、これによってこどもはこの自らの存在を脅かす不可能な役割から解放される。この去勢の結果として、こどもは象徴的なものの領野に位

置づけられることになる。次章で見ていくように、ここでは、父は母の欲望からこどもを救い出す役割を果たし、その関係に安定をもたらす役割、すなわち、こどもと母の欠如を名付け補填する特権的な役割を果たすと考えられている。そして、エディプス・コンプレックスという神経症の主体の生成を完遂させる父の象徴機能を、現実的なものと想像的なものを統御する特権的なシニフィアンである父の名（Nom-du-Père）としてLacanは考えた。

Lacanはこの父の名の概念を、精神病における言語と妄想の構造という問題に関連づけて論じている。精神病におけるランガージュの次元での問題、言語新作（neologism）や反復（ritournelle）などの現象は、シニフィアンによるシニフィカシオンを構造化する「クッションの綴じ目」（point de capiton）の役割を担う父の名の排除（forclusion）に起因するとLacanは考えた。ここで注意すべきは、この事態は、単にエディプス・コンプレックスの展開のなかでの象徴機能形成の失敗ではないということである。Lacanがこの排除という概念を、Freudにおいて是認（Bejahung）と対置させられたVerwerfungから着想を得ているように、父の名の排除という事態は、シニフィアンの主体の成立可能性そのものが排除されているということなのである。そして、エディプス・コンプレックスがファルスによって導入された欠如がかたちを変えて展開していくプロセスであるという先ほどの考察と、父の名を、主体に示された謎と母の欲望の置き換えを通じて、ファルスに特徴づけられたシニフィカシオンをもたらすメタファー、すなわち父性隠喩（métaphore paternelle）としてLacanが示したことを踏まえるならば、父の名の排除は、ファルスという特権的なシニフィアンの排除の必然的帰結と考えられるのである。

以上より、いささか図式的になるが、神経症の主体の構成という観点からは、想像的なものに対して象徴的なものの優位が強調されたように、エディプス・コンプレックスの出口に関わる去勢と父の名が重視された一方で、精神病についての考察からは、その入口でのシニフィアンの導入そのものと去勢の関係が問題となっているという対比が指摘できる。従来、Lacanの思索の展開は、Miller,J.-A.（2006）が「この父の名の相対化と機能化は、主のシニフィアンのカテゴリーの発明へとLacanを導く途上にある」と述べているように、父の名という象徴的なものの相対化とその帰結としての現実的なものの重視という観点から論じられてきているが、ここでの考察は、次に取り上げるLacanによるエディプス・コンプレックスの再考と主体の生成におけるシニフィアンの起源についての思索という理論的展開の必然性を明らかにしている。つまり、Lacanは去勢の問題をシニフィアンの導入と結びつけて考えることで、母子関係を重視する対象関係論とは異なるかたちで、より原初的な次元での主体の在り方についての考察を含んだその後の展開の可能性を早くからつくりだしていたと考えることができるのである。

4．エディプス・コンプレックスから去勢へ

前章での考察では、精神病の主体における象徴機能についての困難は、一般に考えられるようにエディプス・コンプレックスの出口に位置づけられる父の名ではなく、むしろその入口における原初シニフィアンの導入に関する困難であることが示された。母の不在とファルスを結

びつけることができるならば、こどもはエディプス・コンプレックスの第一の時に参入することができ、倒錯者や神経症者のようにそのなかで主体としての位置を定めることになる。だが、精神病者においては、母の不在のシニフィアンであるファルスは排除されているため、ファルスから展開するエディプス・コンプレックスのシニフィカシオンに参入できない。だが、これは主体が母子の二者関係に嵌まり込んでしまうということではない。Lacan（1955-56）が、「精神病の基底では、シニフィアンに関する行き詰まりや困惑が問題となっている。そこではあたかも主体が、再構成や補償を試みることによって反応しているかのように、全てが生じる」と述べているように、精神病者は父性機能の代わりをなす独自のシニフィカシオンを妄想や幻覚というかたちで展開し、自らを主体として世界に位置づけようと試みる。[2] これらの現象は、我々にとって了解不可能な側面を確かに持っている。だが、それをファルスという原初シニフィアンの欠如に対する主体の反応であると考えるならば、構造という観点からは、神経症者にとってのエディプス・コンプレックスのシニフィカシオンと同等の価値をもつということが理解される。

構造という視点から原初シニフィアンの導入とその論理的帰結を検討するために、エディプス・コンプレックスにおける父の概念について、セミネール XVII における Lacan による批判的検討を取り上げたい。そこでは一転して、エディプス・コンプレックスとは「Freud の夢」であり、理論的に分析されたり、再構築されたりするものではないという主張がなされている。だが、Lacan のこの主張はエディプス・コンプレックスを Freud の欲望の産物にすぎないとする単なる心理学的解釈とは一線を画すものである。なぜなら、以下に見ていくように、Lacan はその主張を通じて、去勢の概念をエディプス・コンプレックスと明確に区別して、原初シニフィアンの導入と関連づけて、シニフィアンの概念についてさらなる考察を進めているからである。

エディプス・コンプレックスにおいて Freud が問題としたのは、父の殺害と母の享楽という無意識的幻想であった。Sophocles の悲劇において、エディプスは自ら知らぬまま、父ライオスを殺害し、母イオカステを妻に迎える。そして、この事実を知った時、象徴的な去勢ともいえる自らの目を潰す行為にエディプスは走る。ここでは、近親相姦を禁止する法は、父の殺害によって侵犯され、エディプスがおこなう象徴的去勢は、それに対する代償として考えられる。一方、Freud に従えば、父の殺害は無意識的幻想としてこどもに生じるだけである。父は近親相姦を禁止する法の担い手として、その法が侵犯されることを許さず、こどもは全能の父による去勢に対する恐怖によって、母という享楽を諦め、自らの位置を見出すことになる。第3章で見た 1950 年代の Lacan による再概念化では、父によって抑制されるのは、こどもの欲望ではなく、母の欲望であるという点で読み替えがおこなわれているが、そこでも父は去勢というかたちで母の享楽を禁止し、こどもに象徴的位置を与える存在として考えられている。このように Freud と Lacan のエディプス・コンプレックス論においては、Sophocles の悲劇は大胆に読み替えられ、父は禁止の法の担い手として、こどもと母に対して優位に立つ万能的な存在として考えられている。

また、このような父の在り方は、『トーテムとタブー』における原父の殺害という事象にも見出される。Freud の創作であるこのストーリーにおいて、全ての女を独占する原父は、その

享楽を得ようとする息子らによって殺害される。だがその帰結は、息子らが意図したものとは反対に、父への愛から罪悪感を喚起し、息子らはともに近親相姦を禁止する法を打ち立て、それを遵守することになり、享楽は到達不可能なものとなる。ここでは、父は死によってより強大な力を得て、死してなお禁止の法の担い手として存在し、エディプス・コンプレックスにおいてと同様、こどもと女に対して優位な存在として位置づけられている。

これら二つのストーリーに奇妙にも共通して、しかしはっきりと見出された、禁止の法をもたらす全能の存在としての父のイマージュこそが、「Freud の夢」であるエディプス・コンプレックスに Lacan が見出した Freud の欲望なのであった。Lacan はさらに、Freud 自身の父に対する関係やヒステリー者との分析に見られる在り方に言及しつつ、Freud の欲望についての考察を進めているが、その議論を追うことは本論の目的を逸脱するため、ここでは Grigg,R.（2008）の、「エディプス・コンプレックスはヒステリー者に対する Freud の反応であり、しかもそれは、父の位置を守るためになされた反応である」という端的な指摘を引用するにとどめたい。

ここから、象徴的なものの設立に関わっている父による去勢の概念は、享楽の禁止ではなく、享楽の不可能性に関わると Lacan は考え、『トーテムとタブー』において息子らを享楽から切り離す法は、父による禁止ではなく、父の殺害の論理的帰結によってもたらされるものであると主張する。つまり、父の殺害によって享楽はそのものとしては失われ、論理的に不可能なものになり、息子らはこの法を侵犯したところで、享楽に至ることはできなくなるのである。そして、享楽の不可能性は、象徴的去勢をおこなう「構造オペレーター」（opérateur structural）としての父によってもたらされると Lacan（1969-70）は考えた。次章で見るように、去勢によって享楽の不可能性を構造的にもたらす父の在り方は、ディスクール（discours）のマテームとともに導入された主のシニフィアン（signifiant maître）としての S1 の概念とも結びつけられた。これ以降、エディプス・コンプレックスと去勢は厳密に区別され、シニフィアンの概念は、享楽との関係における主体の生成というより原初的な次元で問題となったのであった。

5．シニフィアンの起源と享楽

シニフィアンと享楽との関係について、シニフィアンは享楽へ到達することの不可能性の原因であると同時に、享楽のための手段であると Lacan は論じている。このパラドキシカルなシニフィアンの在り方はいかにして導き出されるのであろうか。

セミネール XVII において、ディスクールの議論を始めるにあたって、主のシニフィアンである S1 に対して、「シニフィアンの一連のまとまり（batterie des signifiants）」（ibid.）として S2 が導入され、これは知と呼べるようなもののつながりを既に形成していると考えられた。そして、この知は、「反復において、そして、はじめは一の印（trait unaire）というかたちにおいて、それが享楽の手段であるということが明らかになる」（ibid.）と Lacan は述べている。[3] ここから、知としての S2 と享楽のあいだには本質的な結び付きが存在し、シニフィアンの起源は反復と一の印という二つの側面から検討されるということが理解される。ここで、シニフィアンと身体の関係について注目すると、Lacan においてシニフィアンは、身体を構造化し、性

別化するものとして考えられていた。したがって、シニフィアンの起源において問題となる身体は、シニフィアンによる構造化がなされていない、現実的なものの領域に属するものであると考えられる。このような身体を、誕生時における人間の身体の在り方として、セミネールXXにおいてLacan（1972-73）は「享楽するモノ」（substance jouissante）と呼んでいる。そして、享楽するモノとしての身体は「シニフィアンによって、身体にかたちを与える（corporiser）ことによってのみ享楽する」（ibid.）と述べられているように、反復と一の印という二つの要素は、この身体が、それらを通して自らにかたちを与え、構造化していく手段であると考えることができる。

反復については、Lacan（1969-70）は端的に「反復を必要とするものは享楽である」と述べており、この享楽に伴う反復を、身体への侵入（irruption）としてLacanは考える。ここで問題となる享楽は、享楽するモノとしての身体に生じるだけであり、そこにはまだ自我は導入されていないために、自らが享楽するというかたちで体験されることは決してない。むしろ、この身体という他者からもたらされる享楽は、主体にとって自らが扱うことができない不快なものとして体験され、母や養育者というさらに別の他者、つまり誕生後の間もない時期のこどもの泣き声に反応して、それを何らかの欲求や要求としてとらえ、話しかけたり身体的な接触をおこなったりすることによって関わり世話をするような存在を必要とする。そして、反復される享楽の侵入は、この後者の他者の関わりによって、その痕跡が刻印（inscription）というかたちで身体に刻み込まれる。このように、他者からもたらされる刻印に媒介されたものとして、主体は享楽を扱うことができるようになる。主体は自らの身体から生じる享楽への防衛として他者を必要とするが、この防衛はやがて自らの外に存在する他者そのものに向けられるようになる。つまり、自らの内から起こる扱いえない享楽は他者としての母に投射され、FreudやLacan自身のエディプス・コンプレックス論に見出せたように母は享楽と結び付けられてしまうのである。

そして、主のディスクールが示すように、他者との関わりにおける刻印すなわち一の印のうち、主体の位置を指し示すものが偶然に選ばれ、シニフィアンのまとまりであるS2のなかにS1として導入され、主体の分割と享楽の不可能性が達成されるのである。S1のS2への導入によって構成された主体は、もはや享楽する身体ではないために、それがかつて甘受していた享楽に関わることはできず、享楽は不可能性という性質を与えられることになる。一方で、S1がS2に導入され回路（circuit）を構成することにより、剰余享楽（plus-de-jouir）としての対象aが生み出され、これが分割された主体である神経症者の欲望の原因として根源的幻想を支えるのである。

ここから、享楽に至る手段であると同時に、享楽の喪失の原因であるというシニフィアンのパラドキシカルな在り方が理解されるだろう。分割された主体にとって、シニフィアンを紡ぐことは、享楽の喪失に対して、再び享楽へ至ろうとする試みと考えることができるが、これは構造的に失敗することを宿命づけられている。よって、この分割された主体にとっては、享楽は不可能なものとなる。シニフィアンの起源が享楽に関わるという考えは、象徴的なものとしてのシニフィアンは現実的なものとしての享楽を制限するための手段であると両者を対置して考える1950年代のLacanの議論とは一線を画すものである。原初同一化の対象であ

るS1がS2に介入することで、主体は対象aを分離し、享楽との距離を取ることができるようになるという本章での考察は、主体はシニフィアンという象徴的なものによって、現実的なものとの一定の関係を築き、ある享楽のモードを維持することに成功していると考えることにつながる。ここから、父の名という概念で示された、象徴的なものによる現実的なものと想像的なものの統御というかたちでの主体の構成に代わって、Lacanがボロメオの結び目（nœud borroméen）やサントーム（sinthome）の概念によって示したように、主体の構成は、象徴的なもの、現実的なもの、想像的なものが、ある一定の仕方で結ばれることによってなされるという考えが導き出されるのである。

これらの考えは、エディプス・コンプレックスの文脈においては、原初シニフィアンの排除というかたちで論じられた精神病の主体における問題に新しい理解をもたらす。精神病の主体では、単に原初シニフィアンが排除されているだけではなく、S1がS2に対してその位置を確定し、安定した回路を構成し、対象aを分離することができないと考えられるのである。[4] そして、S1のみによって構成された精神病の主体では、言語によって享楽との距離を取ることができず、パラノイアのように主体が他者の享楽の対象となってしまうような体験が生じるケースや、シゾフレニアのように享楽が身体へ回帰し、自己解体感など特異な身体感覚をもつケースが生じてしまうのである。先の指摘を踏まえるならば、これらの現象は、精神病の主体における何らかの欠損によるものではなく、象徴的なもの、現実的なもの、想像的なものの三つ組が、神経症の主体とは異なるかたちで、精神病の主体においては結ばれているという理解につながる。それゆえに、分析的治療にやってくる精神病の主体に対しては、この三つ組を結びなおし、安定化（stabilisation）をもたらすことが目標となると考えられるのである。これは臨床的に興味深い点であるが、具体的な事例から検討することは本論の目的から外れるため、別の機会に譲りたい。

6．解釈と転移

前章までで検討したLacanにおけるシニフィアンの理論の変遷から、どのような技法理論的知見が導き出されるだろうか。以下、解釈と転移の2点について若干の考察をおこないたい。

Lacanは、自明性に基づくことばの意味という考えを一貫して退けていたが、これは分析主体だけでなく、分析家のことばにも当てはまることであった。したがって、解釈は助言や提案といったかたちで、分析主体に理解をもたらすものでもないし、分析において扱われる事象に意味を与えるものでもなかった。むしろ、Freud的無意識の読解から導き出したシニフィアンの理論に見られるように、それ自体は無意味であるが、分析主体に何ごとかを喚起するようなものとして、Lacanは解釈を考えたのであった。分析主体は、解釈を聴くことから、自ら問いを立て、それに自ら応えるのであり、解釈に伴う意味の曖昧さが、このプロセスを支えると考えられた。また、このようなかたちでの解釈を、Lacanは句読法（ponctuation）というかたちでも探求している。分析家は分析主体のことばを聴くなかで、重要なことが語られたと感じた瞬間、つまり分析主体の無意識が露わになった瞬間に、そのことばを何度も繰り返したり、強調したり、あいづちを打ったりして、発話に区切りをもたらす。この区切りによって、それ

までのシニフィカシオンの流れを不安定にさせ、分析主体の語りに今までは聴くことができなかった新しい意味を喚起させることができると考えられたのであった。しかし、このように意味を喚起するものとしての解釈においては、「意味の曖昧さ」が「意味の多様さ」と結び付けられてしまい、分析をさらなる意味の探求の場としてしまいかねない。そして、分析主体の症状やその他の様々な事象に、それらが現在もつ意味とは異なるような何らかの意味づけをおこなうことが分析においてもっぱら問題となり、それは分析を終わりのないものにしてしまう。

一方で、Lacan は意味の次元を超えるような解釈の在り方についても考えを深めた。そこでは、意味を与える、あるいは喚起するような解釈は、分析の序奏にすぎないという考えを示し、「解釈は、意味を目指すというよりも、その無意味へとシニフィアンを還元することを目指し、その結果、主体の振る舞い全体の規定因を再発見できるようになるだろう」と Lacan（1964）は主張している。ここでLacanが言及している規定因とは、主体が同一化している原初シニフィアンとしての根源的幻想であるが、ことばによる解釈がこの無意味の核で行き詰まってしまうのではなく、主体の根源的幻想の組み替えをもたらす可能性についても Lacan は示唆している。この点について、第 5 章における享楽とシニフィアンの起源の関係についての考察を踏まえるならば、Lacan が解釈において問題にした意味の曖昧さは、ことばに対する主体の関係における還元不可能な曖昧さにつながるものであると筆者は考える。解釈における曖昧さは、ことばとの原初的な関係に主体を引き戻すことによって、それまで主体が同一化していた原初シニフィアン、そしてそこから展開するシニフィアンの連鎖を享楽から引き離し、新しい原初シニフィアンを導入すること、つまり主体の新しい享楽のモードを導入することを可能にするのである。ゆえに、解釈は従来考えられてきたように単に象徴的なものの次元のみでなく、現実的なものの次元にも効果を及ぼしうると考えられる。だが、このような解釈は、分割された主体としての神経症者にとっては、根源的幻想の組み替えという効果を発揮しうるが、精神病者にとっては禁忌であるとされる。というのも、解釈がもたらすこの曖昧さは、精神病者を主体の構成における行き詰まりや困惑に再び直面させることになり、それまで象徴機能の代わりをしてきた妄想体系が破綻し、発症への引き金を引くことになってしまうと考えられるためである。

このような意味の曖昧さを狙った解釈には、分析家と分析主体の転移関係が設立されていることが不可欠である。転移を主体の分析状況に対する反応の構造としてとらえ、そこでの分析家の立場を「知っていると想定される主体」として Lacan が示したように、分析家が分析主体の欲望の原因である対象 a を担うという知に基づいた関係がその前提として必要であり、そこでは分析主体にとって常に謎であり続けるような問いが分析家の欲望によって維持されねばならない。一方で、Miller（1993）が、精神病者においては他者の欲望が、「際限のない享楽への意志としての他者の欲望」として存在すると述べたように、精神病者が体験する転移においては、パラノイアに顕著であるように、他者は残忍さや貪欲さという性格を帯びて存在しており、神経症者におけるものと同等に考えることはできない。享楽は対象 a というかたちでは主体と分離されず、他者は主体を享楽の対象として貪る存在として、分析家の位置に具現化してしまうのである。このようにして、転移を過去の関係の単なる反復ではなく、享楽と主体と他者をめぐる関係の構造として理解することが可能になる。

ここから理解されるように、精神病者とのかかわりにおいて分析家は、自らがこのような位置にたやすく陥ってしまうことを忘れてはならないし、自らを迫害的な他者の位置に置くような精神病者からの投射（projection）を払いのけつつ、関係を維持しなくてはならない。Fink,B.（2007）はこのような精神病の主体に対して、分析家は「助けになる他者」（helpful Other）になることを目指すべきであると論じている。「治療において、精神病者は、自分の話を聴き、そして、自身の話すことが病理の一部であるとか、放っておくべきだとかを直ちに言わないような誰かを探しているようだ」（ibid.）という臨床観察から、精神病者が語ることの証人としての分析家の位置とこの他者の在り方を結びつけて Fink は考えている。そして、分析家は分析主体が語ることを受け入れつつも、様々なかたちでなされる要求に対しては沈黙を貫き、自らが迫害的な享楽する他者として位置づけられることを避け、さらに、その語りが分析主体自身の迫害感を助長させるような場合には、自らの判断を控えることなく積極的に介入しなければならない。つまり、神経症者の場合とは反対に、分析主体の迫害感を軽減するために、分析家が価値判断あるいは意味づけをおこなうことが、精神病者との治療においては必要になってくるのである。

さらに、このような関係を通じて、主体において享楽を制限するものをつくりあげることが分析において求められる。これは、主体が享楽に耐えうるようなかたちで、象徴的なもの、現実的なもの、想像的なものを結び合わせるものであり、Lacan はそれを Joyce,J. の作品に見出し、サントームとしての症状と考えた。先に筆者は、精神病者の治療における目標を、安定化として言及したが、ここから、これは精神病の主体における症状の単なる鎮静化やそれに伴ってもたらされる病態の安定ではなく、享楽に対する象徴的あるいは想像的なかたちでの補填（suppléance）という主体による発明であるというより積極的な意味をもつことが理解されるだろう。そして、このような長く困難なプロセスの証人になることこそが、分析家に課せられた役割と考えられるのである。

7．結びにかえて ー ララングと話存在における裂け目

本論で取り上げたような主体と享楽の原初的な関係におけることばの在り方を、Lacan はララング（lalangue）という概念によって論じている。この語は、la という定冠詞と langue という名詞が、あたかも機知のように圧縮され結び付けられることで成立している。そして、la langue が、ある特定の言語という意味であるように、ここで問題となっているのは一般的なものとしての言語ではなく、それぞれの主体の生成に固有かつ不可分なものとしての言語である。これは、第 5 章での議論から理解されるように、シニフィアンの起源として享楽を伴って反復される一の印と関連し、具体的には、乳幼児の意味をもつ語になる前の喃語をはじめとした、もごもごつぶやいたり、喉を鳴らしたり、音を出すことなど、意味の次元以前の発声や発音として考えることができるだろう。そして、ここからもたらされた、ことばのリズムや響きなど非意味論的側面への注目は、今日の Lacan 派における自閉症へのアプローチに大きな展開をもたらしている。

また、Lacan がララングという概念で示したことばの在り方は、一般的に考えられるような

言語の範疇に収まらない、さらに言えば、科学的・哲学的な言語学が問題とするような言語からは、常に逃れていくようなものであると考えられる。このことを示すかのように、Lacan (1972-73) は、自らの思索を言語学と対置させて、「言語学もどき」(linguisterie) と称している。[5] 精神分析と言語学との関係について Lacan は、「無意識が発見されて以来、言語学に立ち入らないことは難しいことであるということにあるとき気づいた」(ibid.) と述べている。しかし、1972 年のセミネールにおいて Lacan が、言語であるようなもの全ては、言語学の領域に、つまり、最終的には言語学者の領域に属しているという Jakobson,R. の主張に対してはっきりと反対の立場を示しているように、これは精神分析の領野における言語に関する知見が、言語学によって全て説明されてしまうということでは決してない。さらに、Lacan は 1950 年代につくりあげた自らのシニフィアンによる主体の構成の理論が大きく依っている Jakobson のメタファーとメトニミーの概念に関して、Lacan 自身が導き出した理論は、メタファーにおける類似性に基づく置換、メトニミーにおける近接性に基づく選択という Jakobson によって定式化された考えとは異なるものであると後年のインタビューにおいて明言している。

本論で考察したように、自らのシニフィアンの理論によって Lacan は、シニフィアンとシニフィエのあいだの裂け目を問題にすることから出発し、そこから、我々が話すということそのものの原因を生み出すような裂け目、すなわち享楽とシニフィアンに関わる発話における裂け目を見出すに至った。だが、このような裂け目は、文法や統語論といったメタ言語をつくり上げ、言語の形式化を目指す言語学においては無視され、抑圧されたままであり続ける。言語学もどきという概念をつくりだすことによって Lacan は、精神分析において問題となることばは、あくまで主体の生成におけるこれらの裂け目に関わるものであるということを明確に示し、既存の言語学とは決別し、ことばについての独自の思索を深めていったのであった。

シニフィアンによる主体の生成に不可避な裂け目こそが、話存在としての我々を動かすと同時に、ことばによる精神分析がその力を持ちうる場であるということを、精神分析の実践を通じて Lacan は示した。そして、これは聴くという精神分析にとって不可欠なひとつの行為によって導き出された帰結であった。このことは、日々の臨床における聴くという行為がもつ可能性とことばを紡ぐことの困難に我々を引き戻す。無意識が、聴くという行為のなかで驚きとともに出会われるものとして見出されたように、我々が臨床実践から学び、その理論を深化させることは、聴くことと話すことに不可避に伴う裂け目に取り組むことから始まるのではないだろうか。

脚　注

1）Lacan は、自らのシニフィアン概念を構築するための着想を Benvenist,É からも得ている。Saussure への言及の直後、Lacan は Benvenist の「可能な用法の集合」(l' ensemble de ses emplois possibles) という考えを取り上げ、そこからシニフィカシオンには二つの層が存在し、それはパロールとランガージュの差異を定義するものであると述べている。

2）神経症者におけるファルスという原初シニフィアンに対して、精神病者においては要素現象 (phénomène élémentaire) が妄想の核として、その構造を規定することになる。

3）Lacan はこの「一の印」という概念を、Freud の「一の線」(einziger Zug) から着想を得ている。Freud において、一の線は主体の原初の同一化の対象と考えられている。

4）しかし、S1 が S2 に介入できないということは、主体の構成において、精神病者が神経症者

よりも何らかの点で劣っているということでは決してない。というのも、分析家のディスクールのマテームにおいて Lacan が示したように、S1 と S2 の関係は本質的には不可能なものであり、神経症者はファルスという見せかけ（semblant）をもとに、この不可能性のうえに社会的紐帯（lien social）を築いているにすぎないからである。

5）この語には、「原言語学」と「言語学もどき」といった二通りの訳語が既にある。前者は Lacan の *Télévision* の邦訳で、後者は Borch-Jacobsen,M.（1991）の *Lacan, le maître absolu* の邦訳で用いられている。前者は、linguisterie が一般的な言語の基礎をなすララングを扱う言語学であるという考えから提出されている。どちらの訳語も、この語のフランス語でのニュアンスを伝えるのは困難であるが、Fink,B. がこの語の英訳語に linguistricks という造語を採用し、いくつかの語が圧縮されたかのようなこの語の構成とそれに伴う意味の曖昧さを指摘していることを踏まえ、より多様な解釈を喚起させるような含みをもつ後者の訳語を本論では採用している。

参考文献

Fink,B.（2007）*Fundamentals of Psychoanalytic Technique*: *A Lacanian approach for practitioners.* W.W. Norton.

Freud,S.（1900）Die Traumdeutung in *G.W. II* .

Grigg,R.（2008）*Lacan, Language and Philosophy.* SUNY Press.

Lacan,J.（1953）Fonction et champ de la parole et du langage en psychanalyse. in *Ècrits*. Seuil.

Lacan,J.（1953-54）*Les écrits techquniques de Freud.* Seuil.

Lacan,J.（1955-56）*Les psychoses.* Seuil.

Lacan,J.（1957-58）*Les formations de l'inconscient*. Seuil.

Lacan,J.（1964）*Les quatre concepts fondamentaux de la psychanalyse.* Seuil.

Lacan,J.（1969-70）*L'envers de la psychanalyse.* Seuil.

Lacan,J.（1972-73）*Encore.* Seuil.

Lacan,J.（1977）Propos sur l'hystérie. *Quarto 90.*

Miller,J.-A.（1993）Clinique ironique. *La cause freudienne 23.*

Miller,J.-A.（2006）The Names-of-the-Father. *Lacanian Ink 27.*

Saussure, de F.（1910/2007）*Troisiéme Cours de Linguistique Générale.*（『ソシュール 一般言語学講義 コンスタンのノート』、影浦峡・田中久美子訳、東京大学出版会）

付記

本研究は京都大学 GCOE プログラム「心が活きる教育のための国際的拠点」の支援を受けた。

（心理臨床学講座　博士後期課程 3 回生）

（受稿2010年9月6日、改稿2010年11月26日、受理2010年12月9日）

Transition in the Theory of Signifier from Meaning to Jouissance : Based on Lacan's Consideration of the Oedipus Complex

KONO Kazunori

This paper considers the transition in Lacan's theory of signifier from meaning to jouissance in his consideration of the Oedipus complex. At first, Lacan reconceptualized the Saussurian concept of signifier in his own manner, in which the nature of signifier was related to the Freudian phallus, which played the crucial role in the Oedipus complex. Later, Lacan clearly distinguishes the Oedipus complex from castration, which led to consideration of the origin of signifier in relation to jouissance. This introduced an entirely new relationship between the Symbolic and the Real, and the essential ambiguity of signifier is then doubled. –On the one hand, it stems from the gap in meaning, that is, between signifier and signified, and on the other, the gap in speaking itself, that is, between signifier and jouissance. From these consequences, two clinical concepts are reconsidered: interpretation and transference. Moreover, this primitive mode of language in subject is termed lalangue, and this concept evidently shows Lacan's rejection of all other linguistics.